

令和 7 年 6 月 13 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2024

課題番号：18K02005

研究課題名（和文）文化政策の動向とアートプロジェクト現場の労働に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological research on trends in cultural policy and labor in art projects

研究代表者

吉澤 弥生（Yoshizawa, Yayoi）

国立女子大学・文芸学部・教授

研究者番号：20513162

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、文化政策の進展を背景に広がったアートプロジェクト現場を支える人々の労働実態を明らかにするとともに、現場に即した文化政策のあり方と、文化の生産に焦点をあてた社会学の視点を展開させるものである。文献調査およびインタビュー含む現地調査を通して、パンデミックによってより可視化された現場従事者の不安定労働、そうした実態と日本社会における労働やジェンダー構造との関係、そして持続可能な文化政策のあり方と現代の芸術生産のダイナミズムに関して議論と考察を進めることができた。その成果は講演、学会、書籍や学術雑誌といったさまざまな形で公表し、広く課題を共有することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではアートプロジェクト現場従事者の労働実態に関する調査を主に進めたが、ひろく文化一般の労働問題に関する研究や、美術教育やジェンダーといった関連する分野の知見などを横断しながら議論と考察を進めることで、文化政策学、文化経済学、アートマネジメントといった学際的な議論の土台を作ることができた。また講演やワークショップ、書籍、新聞・雑誌・インターネット配信記事といった多様な形を通して、各地の現場従事者や学生、一般の人々に向けて研究成果を共有することができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to research the working conditions of those who support art projects that have expanded with tendency of cultural policies. At the same time, it seeks to develop a form of cultural policy grounded in the realities of the field, as well as a sociological perspective focused on the cultural production.

Through literature review and field research, including interviews, I have been able to explore and discuss the precarious labor of field workers--made more visible by the pandemic--the relationship between these conditions and the labor and gender structures in Japanese society, and the nature of sustainable cultural policies and the dynamism of contemporary art production. The results have been shared in various forms such as lectures, academic conferences, books, and journals.

研究分野：社会学

キーワード：芸術 労働 文化政策 アートプロジェクト 文化生産

## 1. 研究開始当初の背景

2000年以降、現代アートはまちづくりや観光、福祉や医療、社会課題解決の方策として位置づけられるようになってきている。その現場の動向に呼応するように、文化芸術基本法(2017)にも、文化事業を実施するにあたり「各関連分野における施策との有機的な連携」をはかるといった文言が加筆された。こうした「芸術の社会化」を象徴的に示すのが、多様なアクターによって作られる「アートプロジェクト」の広がりである。その実現には、アーティストに加えディレクター、マネージャー、文化施設職員、ボランティア、一般参加者などさまざまな立場の人が関与する。ジャンルで見ても美術、音楽、ダンス、演劇などを横断し、形も恒久設置される作品だけでなく、インスタレーション、仮設のもの、ワークショップなど多岐にわたる。

しかしそのアートプロジェクト現場を支える労働者は、不安定な雇用条件の下、低賃金の長時間労働を強いられている。また有期雇用や事業請負を転々とする形になるため、キャリア形成においても見通しが立てづらい。その結果、出産育児といったライフイベントを機に離職したり、別の業界に転職したりするケースもある。文化政策で掲げられている理念を実現するにはあまりに「文化的でない」労働実態といわざるをえない。またここには、芸術分野特有の課題だけでなく、日本社会の労働とジェンダーに関する構造的問題をみてとることができる。

筆者はこれまでの研究(課題番号 21830060 および 24530622)において、こうした主にアートプロジェクト現場の労働問題と文化政策のあり方に関する意識の共有と議論の土台づくりにつとめてきた。また研究開始当時は、2020年東京オリンピック・パラリンピックに伴う「文化プログラム」が積極的に展開されている時期であり、こうした課題や可能性がますます顕在化することが予想された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は上記の背景を踏まえ、日本各地の公的・文化事業なかでもアートプロジェクトの現場従事者の労働と意識、キャリア形成に関する実態を把握し広く共有すること、またイギリスの事例と比較しつつ日本における持続可能な文化政策・文化事業のあり方を提示すること、さらに収集したデータや先行研究をもとに現代アートが生み出される相互作用プロセスを照射する「文化生産の社会学」を構想することである。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、文献資料の読解と、インタビュー調査や現地調査によるデータ収集と分析である。パンデミックによって現地に赴いての調査は厳しい状況となったが、日本各地の自治体ないし民間が行なった芸術文化従事者への緊急的な生活実態調査、またそれに基づき実施された芸術文化従事者への支援事業に関する資料収集、および各国のパンデミック下の文化政策に関する調査報告を活用することで、現状把握につとめた。パンデミック収束後は国内およびイギリス各地のアーツカウンシルの事業現場の調査を行なったほか、ネオリベリズム下での文化政策のあり方に関して現場従事者や専門家と議論や意見交換を行なった。さらに労働問題と切り離せないハラスメント、またその根底にあるジェンダー構造の問題についても、インタビュー調査および実態調査報告や先行研究を収集し検討した。

## 4. 研究成果

本研究期間に発生したパンデミックによって、芸術文化は「不要不急」の声のもと、長期にわたり活動が大幅に制限され、東京オリンピック・パラリンピックに伴う文化プログラムも予定変更を余儀なくされた。これまでの文化政策の基盤が揺らぐ中、イギリスにならぬアーツカウンシルという日本では新しい芸術文化の専門機関が各地に作られていくなか、あらためて芸術文化の社会的、公共的な意義を現実に則した形で言語化する必要に迫られたといえる。

ただこうした苦境を経た結果、芸術文化分野の労働に関する問題意識の共有は以前よりは進んだ。不安定な労働環境、キャリア形成の困難に加え、ハラスメントや人権侵害の起きやすい権力構造が、各地・各分野の実態調査などを通して、危機感を持って可視化されていった。と同時に、一人一人の芸術文化従事者をサポートする組織や機関が分野を横断して設置されるなど、持続可能な文化政策のあり方を模索する動きも各地の現場レベルで活発化しつつある。しかしながら、ハラスメントや人権侵害の被害者に対するケアや支援についてはいまだ不十分といわざるをえない。現実的な受け皿の整備が急がれるとともに、芸術文化分野における権力構造とりわけジェンダー不均衡の是正、そして加害者と被害者を生み出さないための制度的変革が喫緊の課題であることが明らかになった。

具体的な成果としては、芸術文化従事者の労働実態およびキャリア形成に関する調査と先行研究の検討、文化政策に関する国内外の文献資料の検討と事業現場の資料収集、さらにジェンダーに関する文献資料の検討を行い、さまざまな形で公表した。まずアートプロジェクトの労働問題と持続可能な文化事業のあり方に関して、現場従事者や文化施設職員、研究者や美術大学生といった人々と課題を共有し意見交換をする機会を、各地で継続的に作ることができた。また、関

西社会学会での発表「アートはなぜ地域に向かうのか 『社会化する芸術』の現場から」、日本社会学会での発表「アートプロジェクトにおける不安定労働」、カルチュラル・タイフーンでの発表「美術における労働問題」を通して、他分野の研究者や一般参加者とこの問題について議論した。学会誌では、『フォーラム現代社会学』に「アートはなぜ地域に向かうのか 『社会化する芸術』の現場から」、『社会学評論』に書評、『アートマネジメント研究』に「アートマネジメントの労働とウェルビーイング」を、それぞれ寄稿した。また、芸術分野の労働やハラスメントに関して、新聞・インターネット配信といった一般メディア記事でのコメントや対談・テキストを掲載したほか、連合の機関紙『DIO』に論文「現代社会における芸術文化の役割と可能性」を寄稿する機会を得た。また、共著『未来のアートと倫理のために』における論文「芸術労働者の権利と連帯」、また「ケアリング/マザーフッド 『母』から『他者』のケアを考える現代美術」展図録においてアートとジェンダーの問題を論じた「わたしたちは透明ではない」など、さまざまな分野の書籍の中でも研究成果を公表することができた。文化生産の社会学についても、本研究期間中に関連する研究が複数発表されたこともあり、現代アートと労働という視点からその構想を展開させていくための資料や知見を蓄積することができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

|  |                       |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名<br>吉澤弥生                                   | 4. 巻<br>23            |
| 2. 論文標題<br>アートマネジメントの労働とウェルビーイング                 | 5. 発行年<br>2023年       |
| 3. 雑誌名<br>アートマネジメント研究                            | 6. 最初と最後の頁<br>54-56   |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                    | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>吉澤弥生                                   | 4. 巻<br>73            |
| 2. 論文標題<br>書評「喜始照宣『芸術する人びとをつくる』」                 | 5. 発行年<br>2022年       |
| 3. 雑誌名<br>社会学評論                                  | 6. 最初と最後の頁<br>294-295 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.4057/jsr.73.294    | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）            | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>吉澤弥生                                   | 4. 巻<br>18            |
| 2. 論文標題<br>「アートはなぜ地域に向かうのか - 『社会化する芸術』の現場から」     | 5. 発行年<br>2019年       |
| 3. 雑誌名<br>フォーラム現代社会学                             | 6. 最初と最後の頁<br>122-137 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.20791/ksr.18.0_122 | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）            | 国際共著<br>-             |
| 1. 著者名<br>吉澤弥生                                   | 4. 巻<br>396           |
| 2. 論文標題<br>現代社会における芸術文化の役割と可能性                   | 5. 発行年<br>2024年       |
| 3. 雑誌名<br>月刊D10                                  | 6. 最初と最後の頁<br>7-10    |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                    | 査読の有無<br>無            |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）            | 国際共著<br>-             |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 1件）

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>吉澤弥生               |
| 2. 発表標題<br>美術における労働問題         |
| 3. 学会等名<br>カルチュラル・タイフーン（国際学会） |
| 4. 発表年<br>2022年               |

|                               |
|-------------------------------|
| 1. 発表者名<br>吉澤弥生               |
| 2. 発表標題<br>アートプロジェクトにおける不安定労働 |
| 3. 学会等名<br>日本社会学会             |
| 4. 発表年<br>2019年               |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>吉澤弥生                            |
| 2. 発表標題<br>アートはなぜ地域に向かうのか - 「社会化する芸術」の現場から |
| 3. 学会等名<br>関西社会学会（招待講演）                    |
| 4. 発表年<br>2018年                            |

〔図書〕 計2件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>山田創平編著、今井朋・縦山智子・あかたちかこ・小泉明郎・内山幸子・吉澤弥生・竹田恵子・飯田和敏・鷹野隆大・緒方江美・ウーマーリー・岩切澪・住友文彦・猿ヶ沢かなえ・三輪晃義・遠藤水城・百瀬文・鬮恒太郎・堀井ヒロツグ著 | 4. 発行年<br>2021年 |
| 2. 出版社<br>左右社   | 5. 総ページ数<br>260 |
| 3. 書名<br>未来のアートと倫理のために  |                 |

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>水戸芸術館現代美術ギャラリー編著、岡野八代、吉澤弥生、エルケ・クラスニー    | 4. 発行年<br>2024年 |
| 2. 出版社<br>水戸芸術館                                   | 5. 総ページ数<br>176 |
| 3. 書名<br>『ケアリング/マザーフード：「母」から「他者」のケアを考える現代美術』展覧会図録 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

|  |
|--|
| <p>アートするウェブマガジン-oid「コロナ禍と芸術文化関係者の苦境」<br/> <a href="https://journal-oid.org/">https://journal-oid.org/</a><br/>         日本経済新聞2023年2月23日「やりがい搾取を許さない(3)」<br/> <a href="https://www.nikkei.com/article/DGKKZ068647780R20C23A2BC8000/">https://www.nikkei.com/article/DGKKZ068647780R20C23A2BC8000/</a><br/>         ネットTAM講座「アートの雇用・労働環境」<br/> <a href="https://www.nettam.jp/course/">https://www.nettam.jp/course/</a></p> |
|--|

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

|         |         |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|